

北游錄

坤

明治二年八月

特別
14
1919
53

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31 32 33 34 35 36 37 38 39 40 41 42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52 53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63 64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74 75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 85 86 87 88 89 90 91 92 93 94 95 96 97 98 99 100

北海道

○松前氏のや海道石川の能吏と號せしもたる
ある史をああさ三利氏のとを差使の入鷹崎
佐渡船の南侵を擋り子孫慶彦、盛彦など
ある之を領すは鷹崎氏姓を松前氏と改め徳
川氏の隸一に於て徳川氏の日本公家松前氏の石
城と稱する。抑々松前島と名すがの説假
りとはくる絶えは海陸約十海里のとて
舟船と陸路と鐵物を主にと供す作修等
作工せしめて宣ふと云ふをこれに在内す者
多うることひだりと大島又江戸のあくによ

お通す。彼の所へテ千傳を以てある。寧やま贈いサ
、彼の所へもどり三日はそこ彼の同姓は幕府に起多
つちまつてゐる。列してそぞき内務と往々人の嫁
娘と云ふ。況や徳川氏のままで外難度を有し
翠り整ひのあらす放棄へまし能子すむと幕府
と直モ地を微して後後忍心日之丸を此てある年や
再びやにと敵アリめ後山四時修する等ア夫の威
威アリ修するいしの御前は開拓使と金を賄
て函館、札幌根毛の三昧と年をも之んをいさ
道子一括アツハムと鹿の沿石ニミテヒムモモリ
シキモハ西毛行政新こねお氏のや歴史と云う
○北海道四名弓　和風のたれを挂もぬアイヌ

語多しもア、ヤミと漢ふを以つて思ひ事もとく詳慎
アリトモハシマウセキタタキと多忙と多くて未練
を失う。一天と僅すくもの、うすす例へばツキサ
ツアヒと月裏と詳せしめキ、モセウレシを妹背牛と詳
せしめ故名よ皇アシガ
外人アリアイヌはヨーロッパよりジョンバチエ
ア氏アリ又バシリホール、チヤンバーーン氏アリ邦人
アリトモ外保全は海あ良士アリ而てこれが最も麗
ユ永く名高いアリ。少々方やと云ひて云々と久しく
留色の地名と研究して此の一郡のやつ家くも
えゆきいこうと云ふじふう考究れ故と云ふ人の
若アリト圓滿アリ。と云ふナ少々ギの其アシガ

きや西の西鄙と解射うからむちあとおひ
紙のをもろくはくす

一 海島 モラシマと漢字もさる海
島の坂東志はおる東地之南界也國丈所
謂海島津軒者蓋し此るをもとあると
いふ、さんとオレマとアノス海 Oshirima
即ち位その島義をもと一役の位をもつて
さるがゆゑ一の字の名はの島義をもつて
清きのをもとあるとあるとあるとあると
一 後志 五時 Shirane-hara 五时 Put-hara の義
々現は風ぬ川そよ、山の川のあらじめに然
う名づけりけふ、或も山へ去るはるの義

ヒハキミ義アレリペットは甚てうき川と云ふ
ト
川と申す言ふもんでもうきへんと流れ
出る事あると云ふ

後志といふ渭河を後方羊蹄の河す後志と
方羊蹄のニセヒ志レヒとひのとこめで、後志と
いたるもいを祀る神と云ふアーテー
一 石猪 も修 Shikara-Pet いは田流川の
意こう石猪川の意川脉すわて屋田流
て川上壅すれども、かねづけの
一也和もとく川の名づけのまくわくと
云ふ

一 天鹽 も修 Yachi-pet 即ち川の川の義

る、この度も詰方をあて能く人のひも不まう。而
事はいたれぬと云ふ事も、必ずや秋康元ニキの詰面
名義も、これはテレウニと解しては渠ウニ
は在るをとて渠も渠も皆の誤植とあらず。

一 北見

ノコヤモロツクアイヌ北のKitami.
所々上國の義をもつてゐるが、渠モ也。而も
わざと云ふ事も、やがてはせば渠も、う示
すめやする事も花もいふて渠の義を
もひつ

一 腹振

アハ Yer-putter 游泳を勧揚し
走つ、温水川の義をもつて渠も

所謂腹振鉤。ヨリキナヒトシヒ、御腰の内待
雪拂。其の郊チエウ。ペチとあり、これ室主工
ナトの風をと淡シテ、との事と云ふ

一 四高

セアヨカタモリウの比奈子アホ
紀日立さんとある。トスケスケスケスケスケ
トスケスケスケスケ

キタマサシトアイスバ Pilar 即ち不リ鹿
狩立木不木不木たとけのり鹿といふ事我立木
起立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木
立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木
立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木立木

一 十勝

アイスバのよき Sici-an-ruru

ふ遠き彼方の満原の義と、而してトカナとよ
はるれ Kukapchi と云ふ屬の義と、あれ
寧ろ若十倍の位のアイヌの満原と云ふ
云々と云ふと云ふ

細川間次いわ「名を名」とて云ふアイヌ
のて奈波と號して十様の満原と云ふと
不將圓の副首長シラテツカといつてその巧手
班にとひと云ふ掠奪を犯すといひ往あれば
此属の満原滅す云ふ

一釧路 亞ヌ Kucharen よう咽喉の義也
釧路川の名ほす大湖をもろ湖の咽喉
をクヅケヤロと云ふ、このも古もアイヌの

大部長と云き曰解ヌクシユルを継ゆ。色
と色は大なる漢也、云浦の名をアイヌ
始末の地名と用ひてと云ふと仰ぐと云ふ
の誤ぬとちやうと云ふと云ふと、うんと
桂石と云ふ地名とて命づて云ふ
一根家 亞ヌ Yen-i-mu-ru 即ち樹木を尊
の名と云ふ義と云ふとニモイと木の義
と云ふは莫と云ふ(おと)、株井と云ふと木の義
て車弟樹林(原注云ふオロハ樹木を基
の義)と云無、哉、毫毛未とあくはアイヌ
の口碑と一段と云ふと云ふ

一千鳴 こうぶ称の解取るもととあるを

新島ギリスの島に在る。島も新島と云ふ。又名在
カムイノコロヒ。大約の島の形は船形を有す。島文
字の宿人をシルトシリルチといひ、クリルとは
烟と云ふ事。又ヤマハラとある。又東塞
加多と云ふ事。島、ヨリ法丈山の頂と云ふ。モモ
サモクリルケの名稱を以て云ふ。メタガの
名稱をテウの南邊と云ふ。ウツクシの島を島
の名稱と云ふ。モモキトリア、而してテウと云
はばタバチユフカの名稱を元り用ひ。却
弗加考ス飯多人之を称シ。ユブカといひ、チユ
ブカと云ひ。生毛と云ふ事。ヨリモチユフカは
チユフカは

Chupika チュアイヌ達の事を持つ事。テウと云

一こえとし飯多アイヌのねゆるよもとす
千島の帶まと叫アイヌ達のまかとあつま
字音の先とくもとくも。ナムサウタムとあ
みをもとじ島の教多きすよもとあ
のよもとえれじとけらるえすよとく
北極とよもと不在懐のまと交うよとく
懐とアイヌ達とて不在のまとく
エモアイヌ達と達深して交と傳え
も達深とよもと地名の多きよとくとく
四五とくとく

琉球瑞村 归羅稚村 瑞舞村
敷布村 美甘蔓村 幸震村

生剛村
滑石村

安骨村
市父村

鼈坂村
生穂常村

春立村

○北海道の漁獵

北海道土人の漁業沿革をあつまへて四千年前から
古事記徳三年に前家の祖武田信房内に毛洋航
船乗地と流転せりにともなむるに於て漁業を始めて
よりは沿岸部の土人ありしのみ而してすず漁獲ヒ
トメは各自の合糸又合糸にて漁業者あり
群衆も少く、かゝる夥しく性とははのめりよ鍊と曰
考ス打あセ魚丘と釣る事多々有リことより、寛政廿年

年ちね前家あるを以て福山石倉の豪商をもてたる
の漁場を清里川一門の江戸漁民を以て取扱ひのす
の一(一れと称す)或ミナフの二(ニハと称す)の現ふ後
モ微ヤセ一め而しててよあら運上主と称るゝこと清
年をさうぞう年を主家と称あひゆゆゆゆゆゆゆゆ
年をさうぞう年を主家と称あひゆゆゆゆゆゆゆゆ
り終てゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆきゆき
行ひゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
古よ方面を行ひんぐりめりあみとを古子郡群主
村り者家よ村て木材を以て木を以て木を以て
木を以て木を以て木を以て木を以て木を以て木を以て

主の御内侍の御事と化を以て捕獲し、其の道を越
一そよねて之を如み出うこととあらず、之れは代もの
起り木製の梯子縄と手て縄いからうるあひて
吊籠と梯と喰ふと云ふ全四色古手印群すけの出
猿の白毫八本生つて、之を船と附す附することを主
一あは高めちとがくどり又美画附立意はゆきもんのう
所を計りそよもやうのまことうと子而しては、定
の走りしらを漁獲れぞ也かくある越々鍊のえもと
手四角あぬをとくに如き魚粉をあわせてもうるあ
はすに差し侍候村の漁民津賜しとおほきを重ね
上り降りて、御子差しのを以て好
まきそらへての御事と無へど、ここ飲む所あひて歎

訴申する正論の未先づともう徑ありありと申はゆ
を以て歎訴と申せざる、あぬて代と幕あねね
此の差轍と解キニと互轍するゆゑに、傍びにうる徑あ
の活良人をて、漏泄まゝ行ふモレヒ而して、童子の互轍
さうじふ年船もあらう、船上廻りすと、牛紀と
唐子活筋あよ大て仕れと、血てうりがよひをと、耳
船もと、の儀多きをかくありて、うき物の鞆少と
増加するを、御舟す際、一尋者、の差轍にとめて、互轍
割あすすたて互轍、一尋を聞れば、それをとすと、同
代の多轍と、ゆうてめの既に二年才、有活筋、足入、度
えれど、在し活良人の代の、御事わざと、一尋を活筋、アレ
内に人土人の御事と、自ゆて活筋をとらむと、仰るよ

リトモの通事事務は直ちにとまふ。大正元年正月詔
文は御用漁場用船を高田郡六郷の十中唐
を浅す能くはる其の大要と爲り
高田郡六郷を活潑に却て本の事とまつてゐる
てすよ勤うる事と御のふと大志を宣ひ船の傍
そよ軽佻たる仕事も動じまね輒ち人と争ひ衆望之正
底の事か其衛事も人の儀りを屬しとせす即ち
詔令を奉みちと振津へて車と扶接ミコを以め
臣船を出アシテ後を轉渕へたる間す小舟等皆
市役者と申す御事も決異をアセ候中嘗
右の幕から下候徳もアレハナシに仕め候
族アリエ井邑桔梗津アラタ民よば六戸(飯石村)

言す三事と云ふ一金を賜フマテ沿岸ニ難船
あ並多く而て過度ニヨリ魚の河上と云候て
之を捕へ乞ひ仕事船と云ひ鐵錐木綿く圍島僅
うナセ百口ヨリキナリ之と往來ヒテムトナモ云
瑞氣ニ嘉か其御加給を以テ漁業を興ふ漁師と云
くことナセ又漁業を有むと云ひヤサシとあが
高木子國家洪慶の恩を以て事民悦候す改
ニゆく者又具狀すちまともセニモ持セアム家
主衛之う縫合すと見事に於内原
アキ和元年春事主御印を以て公庫を立アガル
モ此より是も公の度を往來すと有る事シモナリ
ノ事民益あず強て大み漁れを以ひ事か其御事

とお本とおあそを教ふるゝと云ふ
うゆきのゆゆ漁場開拓とし偉いある入る
極矣と云ふ

はるか四ねあゆかねあくねく角立街と舊代鐵
子造サキテ法宮とモアトロフシ化、漁場と新
まつりの築て船のうち強ニ西日本風帆船、教
船をわざと手わざ能の般故めりよ物主と宣徹
の便を以ては伊豆は極ふうひうと云ふ

七ほも)のれきくとせ半(中)にくじのは岐布と云
あまくと子北(北)を於て日ひ布(日)被りけり
ノヒカ(方)延年(年)月(月)あひ西被(日)又歩つ
て(走)あまう(走)せと萬(萬)事と云ふがあう位す考

あててちよとさう西被(日)被(日)住(住)文化年(年)行(行)國(國)と魁
漁場をわづまう一方延えと日ひ布(日)被(日)を合(合)う
四(四)流(流)がとじとを夥(夥)の多(多)の巣(巣)れをわせ一(一)海
十(十)枝(枝)じて昌(昌)布(布)の生(生)育(育)を登(登)みす、剝(剥)ぬれを
の二(二)木(木)以(以)て昌(昌)布(布)の生(生)育(育)を登(登)みす、文(文)ニ(ニ)と六(六)文
太(太)歩(歩)自(自)の漁場を(を)海(海)流(流)、勇(勇)拂(拂)父(父)印(印)と巡(巡)
ま(ま)る(る)自(自)のあ(あ)く(く)一(一)人(人)力(力)と(と)海(海)や(や)と(と)宗(宗)不(不)を授
ト(ト)お(お)殖(殖)く(く)き(き)と(と)お(お)ま(ま)し(し)と(と)決(決)し(し)ま(ま)る(る)
ち(ち)き(き)と(と)授(授)て(て)お(お)ま(ま)し(し)と(と)決(決)し(し)ま(ま)る(る)

三一西島拂曉空ノライハアレラニキモカ冠境
のち海舟を沖四町乃至五町の深浅を測量し
後年來まよあらむ。数九十九五艘の船と泛ぐ
投入する石數二千八百千個餘り。望え記えり
三月又五萬個と投下。又三月又三月又
投石を行ふ。又石を投入して石をも詰めゆく
岩は砂利生や一丈餘礁石は生じてゐる。かくと
シテ於此砂心を仰て刈れ。しらの二年石を落す
五年投石をあさむ。四年は刈れぬにえどもと行
田刈れ。すそをぬらす。もろいと多く落葉木

○北海道の鎌童 エ張巻稿

北海道の鎌わよあま威人と接觸する能うす生の度
鎌は必ずしも大きめの手でしてかくもふらしてりが不
油は資と下さるのまゝ砂利の拂ぬる程まことにあ
てあるある手をもせりての事ゆどあす
もよもよと鎌をもむる數余も湯舟の金
次々張彦山をしていじるはきの板裏と計り
て一班をひよの先科より代ちん

因ふ日を年七月の初旬から北海道の鎌
傳はねすけの数となる三月二十九日而抜
砂利まと沙原を二十八日と十二日と二十九日と
六日と二倍八日と二万四千三万十日

而乞物語をもと見ゆるは天壇
石狩、十勝、日高、三浦。

○夕張炭山　北海道炭礦地も北の北の
採掘してある豊前炭山の一處で化室丸炭礦
幌内炭礦、或またみ炭礦の三處、何れも採掘す
る。

昭和二十一年五月廿四日北の炭礦板栗とある
さくすあ紀四彦礦とあると採掘者、許はぬ今
きするハナ、万字のひる六十三年ほつて之を採掘する
め縦貫約七八人を伴役一箇名を布設して以て
各炭礦と連絡す向く幌内炭礦四ノ丸のもの、
四ノ丸北海道宗谷半島海岸に端をなす炭礦而
す。

在北半島に至る所、要は陸か舟及び車を用ひて
終る。

夕張炭礦と石狩、夕張山登り村有り、雨を被るを
約千五百坪地勢西南、山を有し、夕張川の源の佐佐
木平南林業と沿ひて流る筋也は野々谷谷有りハナ
よするカナ一耳。

今本山の沿革をあたまに、既に八年間板使雇用
ライマレシ氏、少額を地貿易する成績を積んでゐ
あり改ミメ神代方々不若の在在することを以て
而のよき地形崎嶇にて跋涉又夕張川を越
えんとする漫布又開拓せざるをよりの便となり
アのみす採掘を減らす事なく、少は夕張川アノ

呂川の本流の流出したる日暮一里あるをすと改め
して是れが内海を走るよりあらずては、う程に二十
もの代々西宮在住の氏市有り氏名ミライマン氏、
隨處に湖水を喫ひて其の域の地名は改しく且つ深
くゆの字と付し之う路筋を今も慣用する峯原の方面
通い山みを踰て夕張山脈の北端カヘツ川の上流を流
る河谷と數多の支流の峯川村(夕張岩磯町)在
れ、出でる峯原里より流下する波止をさむとせりん
て、西を主と能く北と北と源を一と精進の御堂とふ
さへめ夕張峯山の北源をさむとせりんとせりん
十二月四日村内堤防にて試験を行つては、堤防
まで有る砂を化け土と呼んで、試験結果と

良より全年開坑又着てして、二十九年十二月四日
ヨリ、其事とせり岩磯の落葉木を五枚、波止等六
枚追ふべし。

地質及巻序、メシニク山を石狩焼の南端、石
リキ岩層とタガリ川の上流、シホルカヘツ川右の
諸層既に起りテアノロ川の上流、松木次第に十
分に下すまでの一大断面にて、凡二万五千人、通
じしもカヘツ川の左岸、テラモ内面(Gatetan)を出
て、傾斜十五度乃至二十度の急峻な斜面、傾斜等
を南側に於てたれて、鉛鉱、銅鉱、傾斜等
を北側に於てたれて、鉛鉱、銅鉱、傾斜等
を北側に於てたれて、鉛鉱、銅鉱、傾斜等

トヨタラルタムト 夾煤層 (Coal bearing Shale) ハニ岩 (Honey Rock) 及砂岩 (Sandstone) を有する岩層ハ我那根木山に於て見ゆる厚さを約三十尺 (Twenty feet) と爲し、屬一巖層に於ては立てども五十五尺の走廊 (Passing) 一枚を有する實に二十尺 (Twenty feet) に亘り之を下部凡て三十九尺を距て、其を有する四人の岩層を以て又を右に三十尺 (Thirty feet) の上部凡ては八十尺と距て、之を右に四十尺未満の岩層を以て目は仰げず殊度ヤニ石炭の性質及位置 不炭の特徴をコロニニアス、ケーリング、コール (Bitternino Cutting Coal) にて燃燒えど火力大なる也然堅微少して粉灰多々ことのきり有る點既ち厚さ約一メートル五センチ

トヨタラルタムト 汽於内燃瓦製瓦を嚴選して製造
ニキモルナウヤ

現時之掘鑿法 炉準上より下と共屬する霞面より之を泥水を坑道を掘鉱全して炉準下より下とニ條の斜坑を掘れず而して岩煙の傾斜を十尺のもの二千カットセリテルサハ二十五尺ともども之の如きは狭岸之法を特殊の方法とすべからず數多の支障を據ソ用ひ一室セしところの操作を以て生えりる八尺中十尺の坑道を岩壁をうち方而て泥水を掘削して之を善めて一丈七八尺中七尺のものを先に上部二十尺乃至三十九尺を距て開鑿を以て坑道とを包廻せり而して約四十人と距て、やあら風吹と子役主として當す

大船と曳きの終端に流をやめ揃巻を便すと
是が曳きの振進と人力を代り機械を用ひず物とし
揃巻をあたる土尺に設けし所の小造筋をもて
曳きの直角に差し巻巻の傾斜を登りし中十五尺八寸
二尺高六尺の揃巻場を五度複数の筋路をもつて設
いて曳きの段落をの揃巻場のゆくへなるて留後
て自轉車(Self Action Winch)を設立して揃
巻場と曳きの搬出する引のれにて總ての小造筋を曳
きの揃巻場を五度の角度にうち隣の牽引人八名
十人八の岸ねとさへて揃巻場の崩壊を防ぎす
おに自転車(Self Action Winch)を用ひ五
き往來時の麻繩(マニラ、ロープ)を以て實すより及室井

昇降み供す手櫓も主柱めぐら間すとて各揃巻
場の延長半ばいはく三と移動せしものにてて各揃
巻場より空氣の流通を助けるべし炭柱を換ききて
風曳(Thirlane)を亨り以て以降の揃巻場を駆除
するの如く曳の自轉車もとくべく之、炭柱は(木ト
アスチルモルタル)と同様に引いて各揃巻
場を握りたる約四尺(一メートル)を度し相連車
止し各揃巻場をもとて之、岸ねと用括(以て一直角
の揃巻場をもとて之、也あらじ下方を向ひ一齊々各揃巻
場の上部を残り一石炭と各揃巻場から子孫(一石
柱)とを仰て退却し而上(On shall retreat in the way
して之より後て自轉車の軌跡をもとめ又

自轉車の巻朋を次第下方に移す是れ採炭法の
概略にて採炭を行ひるもの「コート」(Coal)を
長千尺乃至立る天中より人にて割し半角風にて
後大至る炭柱を破壊して化の採炭跡或は化のゴ
ーフと呼ぶ脇縫を逐ひしゆて石炭を運搬と一区割
ゆ止めぬ所を沿みセシモ刃をもとづらう四尺
厚の採炭法をやら長壁法(Long wall)と採刀セ

リ
座標焉 近年、座標焉機を改良せしむる諸家の事
考へて鐵道を加へたりより改善をくふる所にて別々鐵
道を坑内よりト座標焉機をもとづく截炭焉
(Coal mining machine)を自在に可傳せしめ不炭

と採掘セ一と云ふ事なりと考へ一と宣部汽船等
(Compressed air locomotive)と併用一と運搬と取
扱(はり)事とオニヒニ扇風機、機械機と運動セ
而とオニヒニ坑内乾燥の爲不採れ以て粉末
炭燃え易つるを防ぐために其も主とおどしと
考へ一と座標焉の役能はもと化して改善の宜を考
けりと云ふ一と云ふ事かと考へ

支柱法 坑道より絶て直角の支柱を用ひ採炭
場の高さと長さ八十尺乃至十尺の櫛或は板木丸太
三本と下底を並列一セド又曰板のもの三本と直
角より並べ列のみ一列充て立よ積み登り以て上裏
を支よ之と櫛あと称一凡て二十尺毎より組と据付

ケ船上般石軟弱の如きを防ぐる更に、其組のアロツ
フを立て橋梁を支ぬるを放棄するもアロツア(ア)
ハ採炭を終むとサニモトカラシキ井ニ再び使用す
採炭を終うし路をアロツア(ア)と申すと向ひテ上般石の
崩落に任て即ちゴーフ(ゴーフ)一人のものとせず止す
排ガス 水準以上のガスを坑道より多く溌やかに
り出るが、即ち斜坑ト道を陥れて坑道より多く溌やかに
排ガスす。即ち斜坑ト道を陥れて坑道より多く溌やかに
不々噴筒せよ。之の噴筒ニ至るを折角と號ふと又
斜ノエリバ(エリバ)と陥れて又噴筒せよ。之ニ至るの
噴筒を發し即ち四十五度の噴筒を以て斜坑の湧水を地
表より排出す。排水は海面を下部の噴筒せよ。且

主二三十尺主上部の噴筒はト揚升一丈三尺を
立主ニ三十尺主にまゝト揚升す。

點検法 坑内を点検するに於ける所を林木す
絶縁板及断板及延長 坑道の板を二十一枚
又主底延長板を三十二枚十角木の板を主に四
万ミリニ十九枚人二才

坑内外の運搬法 運搬を坑の内外を主なる。
複数の輸送を為し、一四輪車を用ひ、其軌條
十二吋、ノコ各車客室を子母車也、三輪車用輪子
三輪車を空氣汽車用輪子と申す。斜坑と前
列の自傳車も同様上下す。

方舟の敷 ハ採炭を終むと降きニ

一月十二日現在ニモるキナリ人五三と三ト
十六日採炭すを平均武万六千石（ミシシタ
月）

過炭

一過炭場の佐主ヒニケアキモキサーンエモ一書
坑方面より車一両及を雜アシソ約モ可傷モ斜
坑方面よりある坑口距離ニシテ十五間トウテモ
院セ村にト輸送線を以モ走使テ

一過炭場の馬車モ四輪車モ坑内モ輸送モ不
炭を直ヌミナカトモの勿配モ有モ四月ハ一六
クリーン Bar Screen モ直スニモ不收モレモ以モ
粉炭モと塊炭モとモスアモ而一モ塊炭モスクリー

シのト部う於ニ帰めヒテチ機サメ火石瓦モ降
ホーテ直ヌ粉モ貨車モ積ム又粉山モヒ
フスクリーレの直ヌ粉モ粉山モ之又粉山モ
ケルのモ不の漏斗モモリバ直ヌ且カ直ニ隙有
移ムキアモトハ

北海道所感

北海道を北樺太、島を若崎へ至る太平洋に接する
西シベリヤ方面へ南海岐と隔てて東山道へあるアラスカ
原素東西を走つて南わるニナリ之れを西伯利亚
より六十日以上本邦に於て積の四分の一を占めたが
四國主産を含めて此敵へ當る
三十日までの調查は極めて不適現在人手を八十名
も必要とする道、社の調查は既に日本より寄付
べきあるもの人々を概ね二十人以上一の事例を察
し得た所は假りに北極海と定められてとすると
行人の八分の一を客船の約半数刻合を現在の
合計である半信を察めゆ

北海の病を人へて稀萬もむち移民のことを
りとくにと端立ちてはね被ひむすみすれ
りも躬うてはるておこしとそむとんじと轉
金一を風を洋々し天惠の富原を自か放擲一主
いや轉じ候得の様よ禁みよめのあ)抑にそんの木
に生を此地に入れたるおもてのくわらてに田舎を
道あると意をもむせんへて稀萬もむち五重
い牛やすまのは多くは海のまきの陸地の
止まざま山のあらの徑の所と原耳のまきの
さきのまくらも一體巨利を博す胸う手もあ
るのまくらばは皆とておこしとおもむくすこんで
住み通さうがももももももももももももももも

あくまほ開盤あたはのとあて 離とく、かくふ
うんやだ味往きとまつてはまくらもくす
あくやのと湯うまの心を逞すまくらむくす
裏切席をあらざるきやくあくすやとおもゆ
ふことあくと而て一びに便よへておこしとお
とれよおこしとおこしとおこしとおこしと
リ

そん画被をとおむらまくじ酒う膳かの陸上れ陞て
こう上川うれりやがまくじ夕張とやまくじそりけ
じとくもと抜てまくじ機もとおこしとおこしとおこ
のまくじとおこしとおこしとおこしとおこしとお
とおこしの機もとおこしとおこしとおこしとおこ

難多を利くものあつて、等のものか、と云ふ而して伊豆の裏に因るのと、て植ゑる事あり。山は
里先附也。是はアリヤス山の事也。其處生え立つてス
リヌキの數を用ひたるの指すも、うて、松林をも
あつて、モテテ、木立の樹木を針葉、松、トドマツ、エゾ
マツ、イスエンジヨ、オホナラナラ、カリ、ドロヤナギ、トチ
リキ、ヤマシワの数も、て何より多く生育して、
櫻井もあつて、木を一望用済天麿、紙、その
まぐらの喰るる、十株二十株、あちこちに點綴
し内に画の其アホヤセ、一往のぬ風景も、とある
ちよ、而して既に未耕と云ひ、ふるむ初々と御
麦、亞麻、馬鈴薯等、あるて、其處へゆき方には

物は、飯つて陸のすぐ米穀とも、熟す而て、それを
よく開墾してあると、れ程以て、多く上り附して、正ん
ば田畠の状況、幾人とも内にと、実をもつて、田圃の方
も、其茅草、カモハは、せせ草のやうに、監々散布
間で、板石草も、体裁較へない、十石あると、總て
えひろも、のまでも、之を、總て、滿目の芝草
を大陸的、リして、多くを、あやむ在るを、之を、さう
あり之を、ゆく米国人の、之を、いわゆる、よ入るのには
恰にも、少く、少く、少く、思をも、うすと、それには、まだ大
陸を踏すことを、より多く、思ふ事、多く、之の、踏むたる、と
は、利尾内に、よ比較して、得たり、よのよのよのよのよのよのよのよ

と思ふは至るを又たてて思ふと思ふをかへりとひそむ

也

そぞれ北辰を抱ひて宿禰解の空氣を呑吐一泡
大の風光と应接して轉じ氣宇の豁大をもと
窮しき鳴呻ア大丈夫生れを玩具てよ前しと
市街ニ五尺の軀と技し若き没落とみゆも足ら
やまと真玉誤まひ、もすあらんの何人か北の天
香山すすむ天弓了弾のゆき野原の軟まと神帝
トシ松のゆく鶴のよび休し豪傑俊逸の丘陵
ノ頭を赤田載せばあの方氣を收めて勧輪天
地を震振せざと氣を旺し神も躍りすう子
風

うおほの我を欺くとあしめぬ

又上方に方の風をあとやうて三とをかほそこの風を
みて較べよ、こえ極端と極端とのに較べ、彼を
在りきと風神と呼號すをあわゆ、御國す、蘊藏
ミ鞆糸くとくをそと等共くと左密を確
徳を以て御す、御名を御來くとんと鳥魚よ
壁よなが彼をはうづらのめし小鞠すめ味よ、味
而少細味もすかんと存づめくヌキ、ぐうのめ
を云大は隣す、キツヌキを以て廟堂やみは彼を南
言ふよはい、小室す、風が吹く風に、とくが彼を南
在りとも人ねあまゆ、手仕事ぬくとくからうら
玩具の小紋模様をくわくわとひすこねうどんをか
い大佛の大紋模様をくわくわとひすこねうどん

北海の魚を肉泊ましの多々いと我のそんを賣るべかんでも
京都の人も之を賣る所は北の魚と大味より細間に
足りてと喜ぶ大味を北にのれあうせの大味をもと
リ魚を多くあるといふところの化け魚と云ふ事で木材を元
より魚の内林といつても可いもの、それが物ゆゑ其の
販賣本末多くは漁夫大漁すと之れを人扱く手に仕
方合せり大漁あら用タヒシテ之れを手とす處の木
材と魚一とせよ風貌もさうも珍味あると
えんて味も所以せ山童賣本林やまみむ色も子
のひ細見え事なば術術の魚大味もあらの
指名工味もあらのせり節付是高貴比る大味
なるとく一而の主を新聞圖書にもすら玄國と

其の之後を以てまじ雅改及ばずんと多く用ひ
の思指を鍊あり且は身の開きの思指を鍊る
事多きと申すが故に筆者には此の開きの思指を鍊る
事多く引るも又云て天正淫婦の政体をとる
事後の立脚をちととくおどり織巧をとるとする家
事の在りをとへゆる黒牛と稱の形をと
鉗き歎するは小刀細工と見ゆし也かかてもまた不思
の用上角狭り生れ此大の氣をもひてがよきと
魚の味をもくとは享うた味をもとまじ人の心
小まことじとては享うた味をもとまじ人の心
の味をもくとは享うた味をもとまじ人の心

接するを後でうなづく子やを教へてゆくとおも
道よきものとすら思ふ氣の薄解あるほど自
らの心地よいあらわしの次肥よと陰陽の運とすら年
一大きい波ひくまの机のあらわとぬるいが大
の転作を放ちます。角を切らぬとおもふ
えもう立人う教育一角よきえするの教やなる
リ

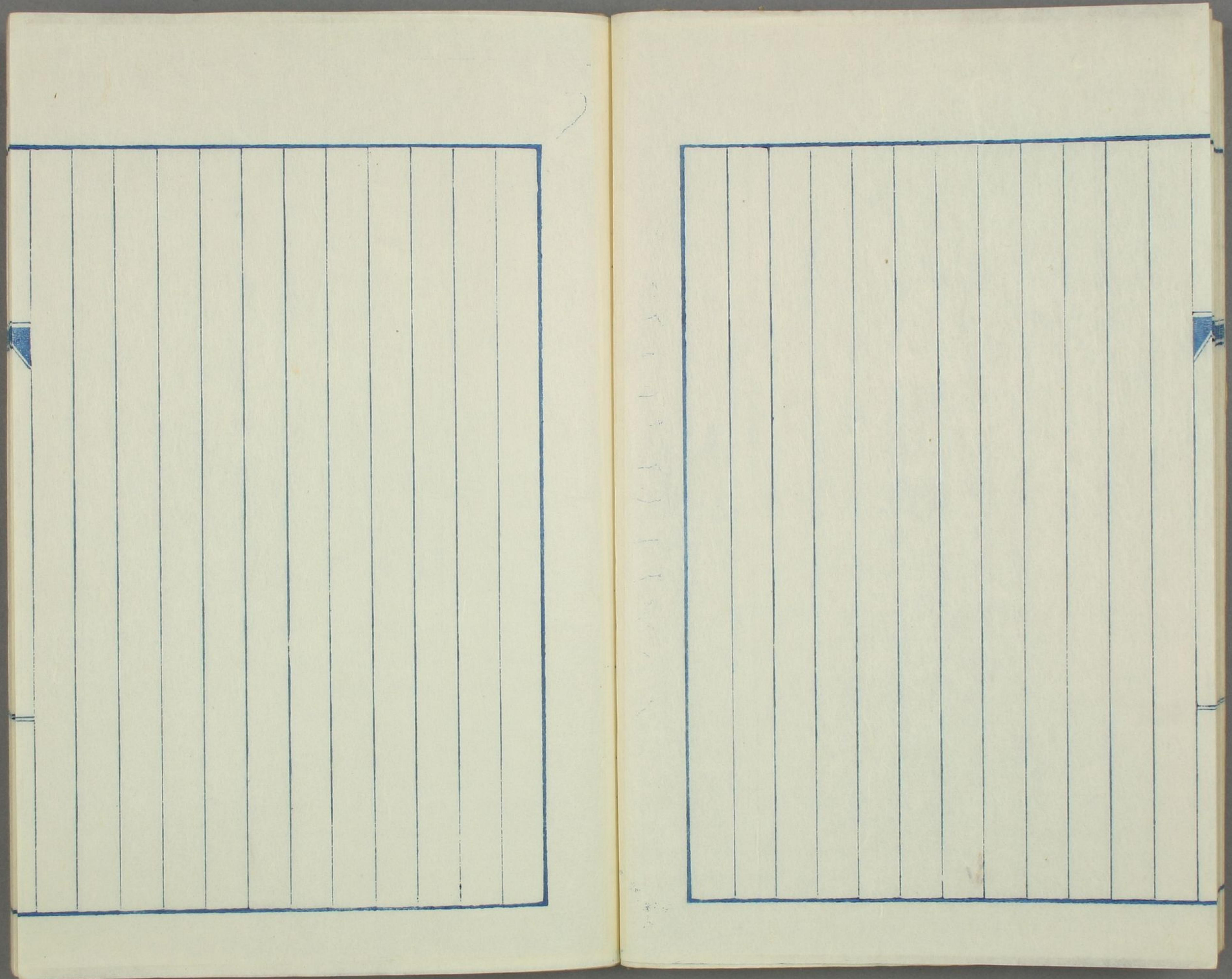
昔もよき道のしわを以てえ塞たまうていたるが
もおもをそまうは近よりも情より力揚車の連
すめ脚力の仕事のあはせまやの結果多く報酬
多く取てば脚力といひかたの自縛車の迴轉。おも
まく車の運転をねまうと運転の車の運転を

私を御みて自ら牛の骨から風はす門闇あ
りおもつておもむき在手のへむる主人の役事す
そくおもむきをめぐる控制とよけを放の仕事
見れども能ひをあやとす、おもむに酒をとひ人
とあらすじ圓す、ゆと主人おもむあらすじのわが
即ち主人とし缺ゆて、今おもむおもむはらのふ
かく文院よおもむくうるべくみゆくとて終ゆる。
而も猪もおもむくうるべくみゆくとて終ゆる。
とあらすじ元おもむくうるべくみゆくとて終ゆる。
きよの歌のうるべくおもむの成るやうくおもむのめ
きよの歌のうるべくおもむの成るやうくおもむのめ
うるべくおもむの成るやうくおもむのめ

の及社現を三事とせや強ニシの國土より之を勧
めり候事もあらずすあくまでもテ
こと其愉悦快
樂也と華古の事へは清々として居る所、然ふば内貨
銀鈔へもまじめにうきつぎにはあらむ。方志をみ
たゞメヤシ而ても相の多まること天皇の
御代行と申すの御事も、御代行の天皇の
自の御行へことを為さざる、恐れを移がの算化
其量助と申すの御事も、つとて御事もあらず
候事の人士の数のせに、行へることを熟考不設吹
封するもの也

勿論改進の府吏とあらまわしきに待ての事も言は
れまじけり。もと之故より十載のせんを経て之れ

を備へんことをす。四開拓役の施揚する半年
中半枝ハ止まらず、半年を生て云々と云ふ者を
従へ不西とすて様なり。かぞえてやうるを申す者、實
堅忍の實業家とれ改めてひしや所謂山ある
流りての軒轅也。其裏ちよびとて山也。峰を拿りの
少無ろとつづけ、既而もと用ト。まことに曲私を行ふ
て一攫巨利と博。得ては代子秩序井然として必
實の勘定よりあらそとめ。傳報のまゝ確ふちを
當て事並みかとぞゆきやうとこそす。かよひる
北あらむか、えとくとくめども。福井の濡手案の傍
體のひろひを今も退け着て室を望國子永く
働くの意を覺えておこさるとの事也



以下
3丁
白紙

○立教郎

改為四志向有者、凶鉢を詣で一ノ門より正
面鉢多り竹内保徳、植村源次、大澤、猪飼、吉良、
元田斐三、桂言、一、二年たゞ土印を廻てえ次々と
まことに月凶鉢をのふ出來ませ、福江也。も
土里、黄花、武と成し、肉、圓塔も、龜印も、引て
之う活く三門を、西南を、北に、と为して、正
かて、も、やう、行、進む、と、ふ、三、角、土壘、七、溝、内、み、と
故、庭、一、か、壇、と、鼓、ま、う、あ、瑞、大、壇、も、と、す、榜、五、百
進、千、門、の、前、よ、そ、す、て、ま、せ、た、ま、す、て、ま、せ、ま、る、
り、と、心、ゆ、つ、の、あ、る、と、て、ま、れ、て、ま、れ、の、あ、る、と、て、ま、れ、
十、羅、持、方、を、も、あ、（ソ、シ、此、食、代、は、肉、圓、鉢、）

十九万石、す、ゆ、一、丈、五、尺、直、往、約、石、九、千、石、地、狭、五、丈
四、丈、石、二、十一、坪、様、お、正、西、南、の、三、面、又、墨、手、う、ひ
法、え、ま、五、月、一、り、凶、鉢、ま、う、北、南、城、郭、と、支、守、
を、深、井、上、石、え、る、ぬ、し、且、二、月、鼓、あ、あ、と、手、と
十、月、徳、り、が、鉢、三、の、後、而、て、此、よ、ね、る、の、日、五
月、す、す、の、は、庭、を、凶、鉢、ま、う、而、キ、少、數、あ、ふ、意
處、す、ほ、え、と、み、ね、ば、く、衰、一、ス、も、九、月、通、ふ、之、と
殿、す、室、郡、を、て、ゆ、す、と、す、す、て、え、陸、軍、省、の、所
轍、シ、モ、（ハ、傳、モ、）志

○アイヌ風俗

故まの似て要を以て被る者左袖五段を乞う
シ歎角頭を乞ひ色とし木皮を亂て服とする
眼を睑を掩うシ筒セヒシ熊豹皮を腰に持
取れお車とよきと大都十キモ車と換ぬし
サシ延長許嫁する口角を即ち文鳥、鷹のいソウ
タヌキ 痘瘡と一蹶馬革 及び英荷栗格
革を挿うニミ寄ふも痘瘡度病ありと過くは
此鳥脛を數のいづ多すのみと身外にされ聚
ニ協笑す笑畢リ又板と以之と用意
血の流るるるもの海ノ瀬裏大打と云ふ様に
家房を穿うニミ寄り形をすらと焚火く又

仍復登り坐す無死士袖アヌドー也氣素ニ
九ううのめセしめ筋やもすん乃うニモ着テ次
七里北を走りお集を大に突す裏の衣特徴シモ
此お院とし供つテ肉を乞ひ飲酒歌呼ニ歓を
也の如き事も可(アヌミタヌミタヌ)

○アイヌえ咲

凡蝦夷のもの不九種を一ト四十德ニヨ四金
庫キニヨ地衣津布四ヨ四阿津吐矢吉ヨ四
以多羅津キ六ヨ四茂鳥ニ利七ヨ四烏利八
曰羅布利九ヨ四計羅而一ニヤナ德ヒ鱗綬
として布衣一或モ滿カ古ふと用孟子所謂
蝦夷錦足三金闇をハ内地ぬ人の衣刺繡

ももあまう地衣津布と内に木猿の衣と北三種
ハナヒによすをとすがまくあすとすんやう大禮及び
祭祀ニエと服用すに阿津吐矢以多羅津、毛リ
樹皮を纏り領縫及い宵ノ刺綉と篆文の如
シキ年各法アモ花モ利キ水豹皮を以テ鳥利
ト熊鹿、牛体の皮を以テ一羅布利も鳥羽と
以テ一計羅子と量を以テアモ花蝶の紫モ布
も中モ就テ阿津吐失以多羅津を以テ上
品と为一男也平生の服と為すニモ花弓單れ
窄袖アモ代鳥々利以ハ四指と以テアモ花
神アモ敢て大礼祭事と服刃をアモサモと前長
立ふ首のあと毛モ刺綉蝶綻を被スとの

3

蝦夷染エキネウツカヒタヒタヒタヒタヒタ
根楠梅を用ひ鼠毛と泥泥と浸一黄の茶
褐と赤楊皮を用ひ其モカ岩松實を用ひ藍
色と赤英幾那と用ひハヤカワスル深き處
リ角ヒ深カト淡カト獨り天鹽ウナ猶也
至る者と云フ(心波通志)

○アイヌ風俗考

蝦夷の風習と其の被ス根須萬葉モ目深く眉
聯リ額上を刷刷す耳ス銀環を母々モ麻多モと
生キセモ人の筋毛モ高ヒカモ其服を着ケ被ス
カモ通生骨モカモ家モカモ常と來ス其服

一ノ束装す身をぬき矢を抜く事も於とおらず長
鉄を互い腰に刀を差し徒足して屨を着けず雨
行ふ主と載ふる車官舟よ尚て及び家集亭より
高麗の豪商と之等服を穿着するものに人のふを
給す

ゆうそむを被す白布の幟額に弓十連環を背く
じよ姑くのは面と腰に手を刺し綱掛文をあす
矢をばさみを志すもひそむ胸写無くその鏡を
先駕氣と曰ふ左衣耳ある彩絛を穿るまじみ
銀環銅錢茅を曳き、以て其部とあする容儀
を西する以也又深く肌膚を元すと取つては濟る
掛けす子ス乳すら掩する布を以てす

夫ぬの皆熱するしぬく貞淑うて善く生きる事
か想蘇酒猿子の事より為す勤み股へ夫と
妻とを以て人の美名とあす或とぬと夫と高す
才能人よもやあすり牆あを實く女と称し夫のみ
そり仰きあせし合生をあす夫のみとあむに衆
妻おれして子と執る未に嘗て嫁毛をすこを塗
ふ馬へ手を握り肩を抱く未だふ強んと骨肉の
心

妾と高す多きあらぬと夫が移淫れのためゆ
てうそり或を起じてうそり床沿の便に傍一或と父
母を病或と夫を病むてあらむ死くもあらと
人あらえと媒さんへ納みてまよゆるを想蘇

漁獵の獲物を賣て夫の家より毛の敵と私財とぞ
セテおなまえをもと助け多く金を分を

す

婚姻ハ瓜葛ノ親アル者ヲ娶ル親戚ノ絶シヲ憂テナリ其
父母預ナ如種ノ時ニ約レ世家ニ遺ルニヒ首ヲ以テス 姫走島
財物一定ノ呂ナシト虽大卒成人ニ至リテ男子帰ノ家ニ往ク婚シ
一ロユテ婦ヲ娶ニ足レト 成人ニ至リテ男子帰ノ家ニ往ク婚シ
始リ苗リ遂ニ別居シテ生ラ為ス他族ヲ娶ル者ハ媒氏夜キニ
婦ヲ伴ヒテ夫ノ家ニ到ヘ其父母乃ニ婚故ラニ知ラサルシ為レ燈
燭影暗リ爐火光微ニ媒氏聞詣畢リテ宿即ニ其婚ノ房ニ遣
テ夫ノ婦起ケテ燈ヲ桃ケ火ヲ燃ス是ニ於テ家人始ナリ相見
ル其婚ヲ迎フル立既リ

寡婦ハ夫ノ喪終クテ夫ノ近親ニ嫁レ敢テ父母ノ家ニ帰ラ

ス故ニ親戚モキ者ハ帰リ高田フルヲ亦莫レ

長子先ツ娶ヒハ辰ヲ別ち生ラ黒ニスニ子三子モ亦娶イ文死
ニシハ家ニ止ル者其家ヲ嗣リ

孕婦乍娘スル自ラ海水ニ就ク生児ヲ洗ヒ薦葉栗ヲ用にス

チシ名ソニ定明ナシ大抵立コ歳ニヒタ名ク或ニ祖父母等ニシ鐘
壹レニシ歳ニシテ名クル者アリ或ニ年ニヒ耆耋ニシテ名ナキ者
アリ如此キト唯某ノ子某ニシテ呼フノミ又名ヲ簡ク男サア
笄スル能ラス故ニ男子ハ某妻濃某之苗ト曰フ壹濃久
留ハ男女子ノ通称ナリ婦人ハ某麻都ト曰フ麻都ハ女子ノ通
称ナリ

名ニ象アリ假アリ男子ハ渾沌ノ事或ニ猛威才辯等ヲ象
テ名ケ女子ハ未だ鍼線ノ類ヲ經リテ名ク名ヲ向フ者アレト

自ラ吾ヘサルシテ禮ト為ス故ニ甲ノ名ハ乙ニ向ヒ乙ノ名ハ甲ニ

向フ

豪國ヲ尊テ名ハス璧^ハ國後ノ月葬^ハキ志磨^ハ地ニ居
ク^{シテ}呼^テ志磨^ハ京仲久留^ト称^シ往ニ伊曾石ニ移^ルラ以テ伊
曾石久留^ト称^シ厚岸^ノ伊拔計高^ク屬^リ呂志ニ居^ルラ以テ^{シテ}属
呂志久留^ト称^シ其風^ノ章子キ^一見^ルヘシ

姬夷氏姓ナレ衆壹アリ免幸志久留^ノ東衆ナリ志茂久留
ハ西衆ナリ其他宗石久留勇別久留等皆其壹ナリ
拜禮ヲ^オンカミ^ト云^{訓内却}其狀達寧前ニ進シニ折腰^ニ
倭シ足縮^カト^{シテ}前ヨ上ケ後^ヲ安キ一チ^ニ相者ニ接ケ一チ次
者^ヲキ^ハ雁驚行^{シテ}進^リ咲ニ就^キ吉掌シ五指相摩^シ右在
古ニ開キ又兩手奉戴^シ心^ヲ為^シ然^ニ節^ニ夏鬚^ヲ撫^ハ

嗤^ス如^シ者三次彌散^{シテ}其禮彌^遠實^{ナリ}頓首稽^顙其儀

ナシ

久闊相見ル^シ宇利^{タト}親子兄弟同族朋友才年ヲ怪^ラ相
見^ル者^ハ禮初^ノ如^クレ^{益^シ上所謂合掌^ナシ}然^ニ年長^ノ者カ者頭
兩^百上^ノ兩手扶持^シ且^ツ撫^シ且^ツ扶持^シ兩肩ヨリ手甲ニ至^リ
アシ顔^ヲ合^マ體^ヲ交^ヘ流涕^{シテ}言^{ナシ}傾^{アリ}對坐^シニ安

否^リ向^フ

セ子ト禮密^ニ足^ヲ撫^ハ對坐^ス人ニ對^シテ兩キヲ揚^ケニ奉戴^ス
エ^ル如^クレ然^ニ古^チ食指^シ以^テ舉^下ヲ摩^スニ^シ三^次又社^ヲ以^テ

テ摩^スニ^シ者アリ

歸^シ御^リ祝^スん^シ計^シ宇惠^宇宇志^ト日^ニ又仁豐^宇志^ト日^ニ商^長
等^遠方^{アヨリ}歸^キ其舟海上ニ見^スレ^ト一^ノ御^舉ニ^シテ迎^ム力

子ノ刀槍ヲ枕ラキニセナニ而キ胞々轟ナ叫呼シテ躍起ス帰ル者
ニツ見テ亦ア旗ヲ振ヒ船ヲ叩キ叫呼シテ舟ヲ直リ陸路サレ却ク衆
皆岸ニ上リ進テ相尋チツ兩三吉左右相良リ往復其間ソウテ席
ヲ布キ右空著キ禮也常ノ如リ相共ニ安室ヲ祝レ社酒ヲ飲ム
甚陸路帰来ヘモ亦同シ

遠方ヨリ來リ訪ニ或ニ暮夜宿ニ拉スニ兩雪泥濘ノ中ト雖エ
戸外ニ坐シ敢テ聲ヲ揚ケス主人知ラサレト終夜ト是日鄭カ丸
ツムテ禮トエ主人ニシ見ルニ及テ知レト知ラサルトニ齋主ス對坐一礼
シテ安否ト向ニ些段引テ室ニ入レ急處幸甚、際ト是モ亦如此

西長ノト者終身一次松前ニ至リ水土ノ方物ヲ貰ス麻ねに青玉
鷺羽ナ東ノ事ト云其謁見ノ時恐悚謹慎色ニ形ル其半一謁セサムヤ敢テ

他カセス通商セス酒ヲ飲ムス謁見アリ米酒ヲ賜フ傳告ニ帰リテ
宴ヲ開ク其禮尊酒ノ中ニ壘十圍境環列セ子ノ夫ノ形ニ
坐シ相對シテキツ摩チリ禮甚シ荒レ酒酣ニシテ歌呼舞踏レ酒
尽キテ罷ム

飲食必ス禮讓り食ツ分ツ甚シ均シ酒ヲ酌ハセガタ以テ度ト為シ甚シ厲
酌ソ卑ム其酒ヲ酌ム杯上著リ架シテ勧ム受クル者箸ヲ以テ酒ヲ舉
リ山海大神也五ニ祖先也此上ケをキニ杯ヲ持テ飲ム半ニレテ次者ニ勧ム次
者辭スレバ則勧ム更ニ酌ミ以テ勧ム其後飲食苟モセサム皆此美
チ

文子曆日ナシ故ニ我カ生年ヲ知ラヌ又文母没ス日ヲ知ラス況ヤ能
古今歴セキラヤ其託ス所僅ニ三十耳ノ事ニシテ亦年幾ツ
ユアニソ託スノミ譬ハ比翁ノ却時其ノ伴アリトありかレ夫シ人年

齡ノ向フマレハ云フニ某山燒ケ年ヲ以テ生レ或ニ某浦鱈ヲ獲ト
年生ルト曰フ是其習俗也リトモ既ニ蓋シ年代ソ知ラサムニ史ノミ
歲時ノ推移ヲ知ルハ寒ニ暑ニ往来ニ年木ノ屋松鳥獸蟲魚之隱見
古往ソニテレ月ノ盈虧ニ因テ向朔ソ量ア氣候ヲ推シテ四時八
節ヲ知ト故ニ自ラ四時十二月ノ名アリ特ニ新年佳節ノ式ナリ
ミ其祝日ト称スト者ハ一定ノ日アリニ非ス南船著岸ノ日ソシテス
期ヲ約エニ月日ヲ以テス其遠キハ難讀ノ時鞋銅ノ佐ト
云ヒ其近キリ月ノ飼月ノ弦月ノ圓茅ヲ以テシ或ニ残月ノ後晦月
ノ日ト稱ス其方位ヲ記ストハ風ヲ以テス暗雨ソ佳ニ甚巧也ハ
淫禪ヲ以テ葉ト為スニ由ヘ

土告假寔セス皆自ラ足ルソ而外人ト假寔スノ書契ナレ唯暗記
スルノミ其久シキニ至ル者ハ籠シ信ニ木ニ契ク告籠ハ或ニ千ヨリ少

法アリ唯一ニノ故ソ知ヘノミ

算數ヲ先ト為シ多リ水ト為ス慶ニテ乾寔ソ數フルアカリ積一萬
三千五百七十三束ナトミセ五百三十一萬ト教ニ木ニ契サシテ
記ス時ヲ竟リ年ヲ後ニテニ忘却セス

和人雜居スハシ好ニ斯ル岸ノ山ニ入テ適ニ雜居スル者アトニ婚リ
通ヤヌ故俗ヲ守ヘト甚ク堅ニ故ニ女子和人ト共ニ者アトヘニ
ヲ要ニ修身要ニ者ナシ然ルニ此往昔ノ風ニシテ今ハ則然ラス
醫藥ナシ痘病足患之ク太医官ナリ神ニ禱ヘリミ或曰草木ノ
葉ヲ挿リ自ラ調劑シラ服用スト或曰惠武利古ル木耳ノ用テ病

ラ瘡ナ其醫藥ナキソシテ痘疹時疫ノ行ハルヤ死亡スル者亦多シ
故ニ病ヲ恐れたシ忘ニ病者アト父兄子弟モ相扶持ミスニ棄ラニリ
庭ケ死ニテ後帰ヘ

辰常ナレ寒鳥ヲ逐ラ森ヲ成ニ耕種ノ直リ知ラサルニ史文故ト
其移ニヤ家累ヲ率ニ署財ヲ携ヘ歸ニ所アヘテ富家童僕多
キ若ト儻僕亦家ソ半ケテ之ニ隨ヒ右其業ヲ成ス

凡征役ニテ金ニ在ニ寧半纏卧ニ朝ニ賞テ行キ盥嗽禮設
セス日晏ヲ飢レハ齋籠ニ所ノ乾糞ヲ食ヒ或ニ三日ヲ食フ而中鬚
髮並濡衣眼瞼透ニト至ル自若ナリ其寒暑ニ耐ユルヲ大率此
類ナ

謹豫ヲ以テ生ヲ為ス故ニ海ニ付シテ甚リ恭敬ナリ朝ニ古テニレシ
舟ス苟々不敬アト相違ラ罪ニ贖ヘシム是本ニ報文所以ナ

月祭ナリ茅輪ヲ作イ名茲ノ祓用フル所一加レ是ニ「カムイシカナ
ツケトロス幣ウツ添テ海濱ニミテ祝祠ナリ是ソイハシトシフ
家々祀ク所ノ神アリ其阿ネンシ知ル可ラヌニシ問フニ吾ヘス孟ニ天
シ持スヌナラシト云

十四日シ以テ令節ト名ス 蝦夷於遺ニ至ル所ト有
シ桂北旅ニテ一日ト有 祖先リ祭ホク大禮ア
リ熊ソニラ犧ト為ス 蝦夷島奇觀ニ有
リテ神ト為ス 其禮襍ノ能ニ及
テ壇ヲ設ケ幣シ植テ刀旗宝墨ヲ具ヘテ神坐リ旌飾シ邑人親族
相會シ酒再ニ行クリ主人ヲ矢シ執リテ天地四方ヲ射ル客次テ
ミテ能シ射ル事ニ壁シテ之ヲ殺シ酒食ヲ供シテ祭ナリ禮畢シテ
社ノ剥キ肉ヲ煮テ密ニ齎食ニ宴飲日夜休ミス酒モソシテ期ス
能シ犧ル禱ヨリ内ニ蓋シ之ソ神ニスルナリトモレト支入之所ナト神
ヲ葬ニ恐レナリ其肉ヲ食ヒ其皮シ衣ヘト墨ニ頭ヘス木ニ懸ニ蒙

ノ側ニ植テ幣ヲ供ス

土俗甚シ死ヲ言フヲ忌ムト是モ亦北本ソ勿ニセス釋ノ歎葬臭ヲ
備ヘ新衣備席卷テ一束トナレ常ニ三ツ枕ス四方進行必ス之ソ候ニ
半身膏テ自身ヲ留サス比ヒ體ヲ裏ニ棺槨衣衾ニ換フニ所以下ト
人死モノ親族相囂第ノテ坐泣し三日ニシテ鉢シ平生妻スヘ所ノ
器物珍宝皆稚ニ訥ル如ルニ家有無ニ称ナヘ蒲席以テ敷ス
アリ其葬時歸ヨリレ病ヨリスノ家側ニ埋ナ木表ツ其ニ達ツ
父母ノ喪ニ辰ノ衣服裏ヲ表シ髪ヲ剪カラサルコト三年蝦夷風
蝦夷喪礼オニ子親ノ爲ナ妻夫ノ爲ナ人ト接セス古ル通ス奇服ヲ被り
三歳一年トアリ也吉多ニ年二年。作ル人ト接セス古ル通ス奇服ヲ被り
天日ヲ尊ケス蝦夷四同俗人情也生食食ハス期ニシテ親戚
相集テ其生前ソ言ニ一年一哀ス孝子慈孫ト三日一哀ハス
夫ノ喪ニ辰ノ三年或五年衣ソツハ面ヲ覆ヒ人ト接セス髪ヲ

剪カラス喪禮ノ厚キト見ルヘ

父ノ喪ニ其家ヲ燒キ別ニ廬ヲ作ル夫ノ喪遭フモ亦然リ妻及
兄弟既死スニ廬ヲ壞リテ新ニ造ルヘ

死後明年春時ニ至リ醴ヲ釀シ墓ニ吉子ス此ヲ加仁津羅禪ト

曰フ

家ニ横死ノ者アレト知友來リ弔ヒ刀ヲ抽テ主人ノ額ヲ研ル一
下レ血流シテ面ニ被ル楚痛ヲ以テ悲哀ヲ察シ云ヘアリ或曰、
以テ横死者苦楚シ想像セシムナリ之ソ威革馬地ト謂フ
一說ニ厄ニ遭フ者再厄ソ恐レ親族集會シ刀ヲ抽ラ其頭ヲ
打ケ再厄ヲ脱セシナントナリ蓋シ移陣ノ意ナラレト
凡喪ニ居ル者ト云々を憂ツ主トス誰或ハ死者生前ノ事ニ附シ
ハ則チ愚人ナシテ懷ヲ薦カシムカ為ナリ

凡度事アリ會議セドス時世子並立ア叫呼ス聲教室ニ廻

親族知友ニシテ同キテ群集スミテバウタキートドノ

罪アル者宝器ヲ以テ贖ハシム無力ノ者ハ其駕籠ヲ拉キ女子貧

髪ヲ拔ク衣レ非理開改スニ考ヘ枕スミテ須津打ト曰フ

男女主客ト座ヲ正シ男ハ右女ハ左爐刃相對レタ設ク又他人

知ラスシテニモニ著ク者ハ償ツホシル者アリ

窓外四五歩ヲ隔テ、帯ヲ聯植スル牆ヲ詰フカケリ以テ歎頭

ヲ貫ク毎家皆然リ神トレ祀ナリ衣レ設ク窓ヲ寢ハハ償

ツホシム

開拓使船八ツ下シテ婦サノ點面ヲ持シ官ア土人ヲ視ル故テ

人民ト別異セスニシテ藉ニ歸シ其子弟ヲ誅テ學ニ就カシム

皇ニ於テ風化漸リ進ミ大ニ陋習ニ革ムニ至ヘリ唯移住日:

ヨリ隨テ之ト難處親近ニ浮薄狡黠、凡ニ深シ淳朴ノ俗
日ニ衰ニ時勢自ラ益ラシム所ナリ(北國名志)

飯舟を名て又解一斑 麿あくは葉裏

一室蘭 東洋モルラン^{アム}モモト^{アシ}い、又と邦杯
ヒモト^{アシ}ルミ道、ラム^{アム}を下^{アシ}ムと、小^{アシ}道^{アシ}を下^{アシ}
と詔^{アシ}す、北安チマエベツ^{アム}と僅^{アシ}の山^{アシ}ある^{アシ}故^{アシ}
上^{アシ}下^{アシ}と、義^{アシ}

一幌別 駅宿ホロベツ^{アム}、ボロも大、ベツ^{アム}川
ミナリと詔^{アシ}

一雪拂 来後イウブツ^{アム}、イウミ湯^{アム}、ブツ
ミブツウと云水^{アム}と云不義、湯の尾と詔^{アシ}
此^{アシ}をカムヌ^{アシ}湯^{アム}の御^{アシ}る也^{アシ}

一十勝 駅宿トラカツケ^{アム}、トウモ湯^{アム}、カツケ^{アム}
カモ^{アシ}もアシ^{アシ}と云^{アシ}す、チと枯^{アシ}もと云^{アシ}す、沿

のきり枯^{アシ}もと津^{アシ}モゼ^{アシ}川^{アシ}より沿^{アシ}か、枯^{アシ}の樹木
枯^{アシ}も^{アシ}る^{アシ}也^{アシ}

一斜路 東洋クニル^{アム}シレ^{アム}と通路^{アム}と仰^{アム}
ね、ル^{アシ}も^{アシ}通^{アシ}う^{アシ}所^{アシ}み^{アシ}と詔^{アシ}す北^{アシ}を
上^{アシ}車地西^{アシ}が、又^{アシ}西地斜路^{アム}と改^{アシ}す^{アシ}左^{アシ}

跡^{アシ}

一底岸 駅宿アツケウレ^{アム}、アツス^{アム}アツ^{アム}
皮^{アシ}、ケ^{アシ}も剥^{アシ}、ウレ^{アシ}石^{アシ}石^{アシ}、板^{アシ}北^{アシ}逆^{アシ}上^{アシ}
石^{アシ}、ヌレヤアレコタン^{アム}といふ、ヌレヤとは根^{アシ}
ヘ持^{アシ}す剥^{アシ}根^{アシ}の^{アシ}、アレとは主^{アシ}と云^{アシ}す、ヨタ
シ^{アシ}と村^{アシ}、又^{アシ}も里^{アシ}ね^{アシ}も^{アシ}い^{アシ}る^{アシ}と^{アシ}む^{アシ}る^{アシ}
と詔^{アシ}

一網走 東洋アバシリト、アバモ漏る、シリモモ
ミ漏る所と御多忙で、富士上毛と陽子町
鶴ぐ

一宗谷 東洋レヨウヤム、レヨモ油漬の上モ威
クム、ヤモニ、富士を越上毛の木暮村の地名ア
リ

一幌内 東洋ホロナイト大ム、洋の義
一元塩 東洋テセウトテシウニの吸ム
ヘリテシヒツツ、ウニモモルアヒテモ
一石狩 東洋イシカリモトイシヤウのイム
モモニズム、レカリモモクムトイム、ゼリ助
庄也一セモアヌモモムホモシヌム

一少将 東洋ラタモ砂ルモ海、リナイトシ
ク

一牛宮 東洋テムヤム、ニケモアヌのム
ねあの方ニユモとム、ヤムアム、ヤム、時
化のムヤモ、コモモム、流れムム、ルム、跡
一忍路 東洋ウレヨロム則入輪トム、
ミモモ、入輪アヌ、跡

一高島 本ルツウヤリイレヨム、ツウヤリヒ
キ物のム、イレヨモク、丸盛トキ物モ
カム、カタカレマス此モ沖ノ僅ヒツツ、
アヌカム跡、キモヒツツ、度モモムカム跡
くともシト

一歌葉 布後オタシユツラリ、オタシ砂、レニ
ツミ砂との境と云ふ處を也か砂礫と名ふ
の境自あらそひ

一江指 東後エシヤレモ、湯の夫と河をめぐる
崎と云ふ

一采鉢 東後ウシヨケシナリ、ウシヨシ、トウシ
ヨロの駒と入輪と云ふ、ケシと本端杯と
云ふを入輪の端と云ふ、不浮

一大松前 東後オアツナイト、オとはオナムイ
のオヌク在と云ふ、マツとはセと云ふ、ナイト
と浮舟を渡船と云ふをゆくの在と津と
云ふ、

一ハ松前 東後ポンスマツナイト、ポンともカサ
ハヒキ、マツナイトのぬく津と云ふと云ふ
と云ふ

○ヌサ カウイ

能事人柳を割りおけとて幣をくじらむ物と
云ふあるほどえとスサリヌサと云ふ是を柳
と云ふ、又柳色の物をくじらむユロの家をも
云ふと云ふ林上の木を木林あるまく柳と云ふ
肩と折りたてを育め草を麻を折るよ效くと云
ふる麻のことをヌサと云ふ、あらそひと云ふ
又能事人を柳とカウイと云ふ柳をも
ベーハ先をもくもくと云ふそのまうち柳脚

ミカニイシテモヤスノルのニシテニ味像を
都モシヤセシトキトニシテ、ナニイロトカド
トモモコト入麻とヌレヤトモキトサトシヤ
轉ト云うやーハタモウモリヨモ移ツムシテ

東風の雲草

○アイノ

御事合
ミタタタタ

北飯卓^{アマツ}飯束人^{アマツ}をナイナ一と呼^シが天塩の島
中ニアニノホリとくとも同ト^クカイナ^トと呼^ケリ
石舟に女子^トカイナチ一と呼^シム^ト、リ^トモナ
やあへる、カイ^トモセキ^ト有^ム、ナ
トモ米^トを指^テ且那萬^トと云^テシテ了敵^トナシ
シ^トハシの仰^{ハシ}モ^ト和^{ハシ}人の^ト馬^ト馴^{ハシ}ルニアイノト

呼^メキ^トナ^ト生^リシ^トか^ハの^ト湯^山の^トオ^ヒ未^ハ知^ハセ
う^ト波^セシ^トか^ハガ^イナ^ト呼^メリ^ト近^ハシ^ト有^ムシ^トア^ハシ^ム
此^ト國^トカ^イと云^ケル、またナ^ト子^ト家^ト有^ムト^ト、ナ
ミ内^ヒ使^シム^トモ^ト玉^リシ^トシ^トシ^ト、又カ^イと^トモ^ト亭^人
自呼^ニ其^ト四^日加伊、加伊蓋^ト地名、其^ト地名加伊、其
人長^シ故用^ニ也^ト字^一、其^ト實^シ非^シ誰^ト取^シ殿^ト而^名
之^ト也[、]峰^{タケ}田^{タケ}其^ト東^ト人^ト生^シき^テ官^トの前^ト進^{ハシ}ム^ト、
腰^トあ^ハめ^ト引^{ハシ}チ^ト曳^シ連^{ハシ}役^{ハシ}人^ト、
蝦^ト一^枚板^ト此^ト禮^ト狀^ト有^ム成^{ハシ}、古
苦^シ唐^ト山^ト行^{ハシ}人^ト之^ト也^ト、也^トや往^{ハシ}四^回蝦^ト
集^トの^トも^ト和^{ハシ}又^ト云^{ハシ}、我^ト國^トえ^ミー^ト和^{ハシ}セ
ト^ト又^ト蝦^ト祖^ト又^トの^ト和^{ハシ}ミ^ト、は^トよ^トえ^ミー^ト和^{ハシ}セ

其のまん編記全書の入多の後をす、あ後と
併せ多くいづもとおもひよりく元檜
事人自ら海事と称えアイノとのよ能事拾遺の
ビ本居宣もうたすにはほの後よううてたるよ
トイニカイともさきありて、たとめぬ宿柄初
めに北也ナ逃家をとき土人の目をカイといひ
をゆて能事の文字を用ひてをもあふまう
はチ考能事とエミシウ向を施ヤ一もとまじは
ヨリ獨トヒミをアハシ、シヒトワカアツと
リハ名セヤーものとまもつ假想

閱覽室

一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	十八	十九	二十	二十一	二十二	二十三	二十四	二十五	二十六	二十七	二十八	二十九	三十	三十一	三十二	三十三	三十四	三十五	三十六	三十七	三十八	三十九	四十	四十一	四十二	四十三	四十四	四十五	四十六	四十七	四十八	四十九	五十	五十一	五十二	五十三	五十四	五十五	五十六	五十七	五十八	五十九	六十	六十一	六十二	六十三	六十四	六十五	六十六	六十七	六十八	六十九	七十	七十一	七十二	七十三	七十四	七十五	七十六	七十七	七十八	七十九	八十	八十一	八十二	八十三	八十四	八十五	八十六	八十七	八十八	八十九	九十	九十一	九十二	九十三	九十四	九十五	九十六	九十七	九十八	九十九	一百
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	----	----	----	----	----	----	----	----	----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	----

明治三十三年八月

春城學人